

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 庵乃音人

挿絵 ゆでそば



登場人物紹介

Characters



たちばな

立花りの

幼いころ、慎吾の隣の家に住んでいた彼の幼なじみ。ピュアな色気を漂わせた少女。



まきむらひなこ 真希村 雛子

サンティエ学園の女教師で、慎吾の婚約者。母性愛に溢れ、思いこんだらまっしぐらな性格。



きたはら れみな
北原麗美奈

サンティエ学園の生徒会長。女王様
気質のお嬢様。



そのだ
園田ルリエ

慎吾が家庭教師をすることになっ
た家の未亡人。匂い立つような色
気を放つ爆乳熟女。

たいら しんご
平慎吾

可愛い顔を持つオタクなショタ少
年。生真面目で、思いやりのある
優しい男の子。

第一章

母乳にクラクラ！

第二章

フィアンセは女教師！

第三章

地獄!? それとも天国!?

第四章

美しい刺客たちの誘惑

第五章

先生とエッチしよっ！

第六章

ハーレムの王子さま

苦しそうに呻き、身悶えながら、エロ水着姿のずぶ濡れ美女が彼に向かって助けを求めようように手を伸ばす。

「だ、大丈夫ですか!? いったい何が……あああつ——!?」

不意を突かれた慎吾の喉から悲鳴が漏れた。制服のネクタイを掴んだルリエがそれを思いつき引つ張つたのだ。バランスを崩し、水に濡れた彼女の柔らかな肉体の上に覆い被さるようにくずおれてしまう少年。そんな彼の身体を手足を使って絡めとり、「捕まえた!」とばかりにエロ水着美女が力いっぱい抱きすくめる。少年の胸に圧迫され、ぷにぷにとマシユマロのように柔らかく潰れる爆乳の感触がたまらなかつた。

「ル、ルリエさん!？」

「慎吾くん……苦しいのっ……お、お願い……また私に……恥ずかしいことして……」

また例の変な病気か、と慎吾は青ざめる。

「弘樹ならいないから大丈夫! ああ……つらいの、後生だから何とかして……!!」

熟れた美貌を湯上がりのように赤らめたルリエは、乳首を覆う小さな水着の布に両手の指をかけ、勢いよくそれを脇に追いやった。ぷるぷるるんつと揺れながら色白の巨大な乳塊が弾み、桜色の乳首を露わにする。色っぽすぎる未亡人はおののいた顔を引きつらせる慎吾の首を両手で掻き抱くと、己の乳頭部に思いきり押しつけた。

「ぷっ! ぷはあつ!? ——にゅぽんっ!」

心地よい窒息感に負けて口を開き、大きく息を吸いこもうとしたとたん、柔らかな肉の塊がゼリーのよう口の中に飛びこんできた。口から離そうとしても、ルリエが強烈な力で後頭部を乳房に押しつけるため、思うに任せない。少年は無我夢中で舌を躍らせた。何とかして、豊熟未亡人の乳房から口を剥がそうという思いからだ。だが――、

「あふん……ああ、き、気持ちいい……はふうっ……ッ！」

（ああっ、乳首舐めちゃった！ か、硬い！ これが女の人の……乳首!?!）

舌がレロンッと舐め上げてしまった乳頭部分の硬い肉蕾の感触が、彼の脳味噌を一気に沸騰させる。一度目は偶然だったが、二度目に舌が乳首をとらえたのは不可抗力とは言いがたかった。れろん、れろれろ、れろん……。少年は本能の赴くまま、ザラつく舌でグミのような舌触りの、柔らかくて硬い肉勃起を何度も何度も擦過する。

「ああ、いい……いいの！ あふん、慎吾くん……揉んで、おチチ、グニグニ揉んで……」
少年に乳首を舐め上げられるたび、快感電流の火花が熟れた肉体を痺れさせるのか、ルリエはビクンビクンとその身を痙攣させ、自分からも身体を振って豊熟の乳房を少年の顔に押しつける。慎吾は一回り以上も年の離れた年上の女にせがまれ、片方の乳首を口の中に含んで舌でコロコロと転がしながら揺れ弾む乳房をわっしと両手に驚掴みにした。

手指に感じる、練り絹のようにすべらかな肉。指の関節を鉤のように曲げてグニイイッと曲げると、指と指の間から零れ出るように、たっぶりの肉が内に詰まった脂肪ととも

にくびりだされる。

乳房のとてつもない柔らかさに脳髓を痺れさせた少年はもう片側の乳房にもむしゃぶりつき、れるれろと乳首を転がして未亡人の乳房の先端を自分の唾液でびしょびしょにする。

「ああ、ビリビリ来ちゃう……慎吾クン、もっと揉んで！ もっといっぱい揉んでえ！」
あられもない嬌声を張りあげ、ルリエは淫蛇のように身をくねらせて女にしか分らない電撃に身を焦がした。次第に高揚感を募らせ、自ら慎吾の手を取って乳房を揉みこむ位置を直させて、「ああ、そこよ、そこのとこをもっと！」と引きつった声で哀願する。

少年は持ち主自身に指定された乳房の先端部のほうの肉をギュッと掴み、十本の指を閉じたり開いたりして何度も何度も柔肉を揉みこねた。柔らかな乳肉の中で、たっぷりの脂肪がダイナミックに弾み躍る。慎吾の唾液で濡れた乳グミをぬめ光らせながら、双子の爆乳は少年の意のままに苦もなく形を変えていやらしくひしゃげ、波打った。

（ああ、これは!? これはまるで、さ、搾乳！）

乳房の先端部の肉を鷲掴みにしてしごき立てるその動きは、まぎれもなく牛の乳を搾り立てる農夫のそれに似ていた。

「ひいっ！ 出ちゃう！ ぼ、母乳……母乳、吹いちゃううう！ おおおおっ!!」

少年の卑猥な興奮をかきたてるように、エロ水着姿の美女が黄色いよがり声をあげる。慎吾はその声に煽られ、乳肉を揉みこみ、しごく手にさらに力を加えた。

乳房の両端にまとわりついた水着の細布が、動きに合わせてリズムカルに揺れる。

ぐにぐにぐに……ぐにぐにぐにぐにっ!!

「おおおっ！ 出る！ おチチ出る！ おおっ！ おおおおおっ!!」

「ううっ!？」

ぶしゅばあっ!! びゆるびゆるびゆるっ！ びゆるるるるううっ!!

次の瞬間、二つの乳芽からまるで水鉄砲みたいに白い汁が吹き出した。

「あはあっ！ 出ちゃったあっ！ 気持ちいい！ 気持ちいい！ はひいいいっ!!」

乳首の先っぽだけでなく、円柱形に勃起したその側面からも、何条もの筋を描いて新鮮なミルクが噴出する。その内の何本かは慎吾の顔に弾けて飛び散り、喉の奥にツーンと来るような甘ったるい匂いを振りまきながら、白い霧みたいになって室内プールの湿った大気の中をたゆたった。これはまさに——母乳射精。慎吾は自分の手でルリエに母乳を吹かせられたことにえも言われぬ高揚感を感じ、とくとくと心臓を打ち鳴らす。

「はあはあ。はあはあはあ……ハッ！」

我に返った少年は、あわてて豊熟美女の乳房から手を離れた。だがそんな彼をまたも夢の中に引き戻そうとするかのように、興奮してさらに赤くなつた顔でうっとりとして彼を見上げた。濡れ美女がプールサイドに身を起こし、少年の手を取る。

「……ありがとう、慎吾クン。おかげで……ソフフッ、楽になつたわ……!」

「えっ!? あっ——!?」

慎吾をプールサイドに押し倒す完熟の美人妻。巧みかつ素早い手つきで少年のズボンのベルトを外し、ジッパーを引き下ろすとトランクスごと膝のあたりまで一気にずり下ろす。ペニスがどんな状態になってしまっているのか百も承知だった慎吾は思わず自分の股間から目をそらした。生臭いイカのような匂いを湯気みたいに放散させながら、カチンカチンに硬くなった桃色ペニスが反り返って裏筋を露わにしている。

「まあ、遅しい♪ フフッ、さあ、今度は私が、慎吾クンを楽にさせてあげるわ」

茹だるような興奮に瞳を潤ませた未亡人はポタポタと水滴を滴らせながら、剥き出しになった慎吾の股間ににじり寄ってたぶたと揺れる巨乳を両脇からせり上げる。そしてうむを言わせぬ強引さで、少年の勃起ペニスをむぎゅううっと挟みこんだ。

「あああああつ……!!」

何という温かさ。何という柔らかさ。そして、何という気持ちよさ。ちょうどいい温度にまで温められた巨大な寒天の塊を左右から強烈に押しつけられたようなえも言われぬ快感。たっぷりの濡れ肉の間に勃起が埋まり、カリ首の出っ張りを強烈に締めつけられる。

「気持ちいいでしょ、慎吾クン? ンフッ、こうすると……もっというのよ」

そう言うと、ルリエは唇をむぢゅむぢゅと動かして唾液を分泌させ、怒張を挟みこんだ乳房の谷間にトロトロと長い糸を引いてツバキを垂らす。慎吾の男根を濡らしながら双子

の乳塊の間に流れこみ、母乳とろけあつてぬめりを増す涎汁。そのヌルヌルした感触に陶然とする間もなく、慎吾はさらなる刺激に我知らず背中をのけぞらせることになる。

「うああっ!!」

ルリエが両手を上下に動かし、量感溢れる爆乳の柔肉で慎吾の勃起をしごきだしたのだ。フンフンと熱い鼻息を漏らしつつ、リズムカルな動きで左右の乳肉を少年の肉茎に擦りつけ、肉傘の出っ張りに痺れるような愉悅感を注ぎこんでくる濡れ熟女。ぬめる唾液と母乳汁がペニスと乳房の摩擦をサポートする潤滑油になり、乳塊の動きをスムーズにする。

濡れて毛先を絡めあつた紫色の髪がユラユラと揺れ、プールの水のせいではなく興奮に潤んだ色っぽい双眸が長い睫毛を震わせながら妖艶に細まる。

「ああ、ル、ルリエさん、やめて！　パイズリは……やばい……！」

「気持ちいいでしょ？　はあはあ……気持ちいいはずよ。どう、私のおっぱい……？」

どうって言われても、馬鹿みたいに「き、気持ちいいです！」と答えるしかない過激な肉悦。心地よい痺れが亀頭を溶解し、背骨をとろけさせ、肛肉の奥をウズウズと落ち着かなくさせる。必死に肛門括約筋を窄めて、じわじわと湧き上がってくる心地よい痺れに懸命に逆らいながら、慎吾は心の中で絶望の悲鳴をあげた。大好きな雛子先生のために一生懸命やりたいだけなのに、どうして揃いも揃って極上クラス的美女ばかりが、そんな自分にちよっかいを出してくるのかと不思議な気持ちになる。

ルリエが両手を小刻みに上下させるたび、亀頭がジンジンとさらに熱を持って疼き、微弱電流がペニスでせわしく閃いた。淫らな粘着音を立てながら、乳房の谷間で亀頭を震わせるいけない肉竿。雛子先生だけのものはずなのに——先生のあんなに必死な誘いを振りきり、先生に恥をかかせてまで我慢した射精衝動なのに、今こんなにも気持ちよさうに豊熟未亡人の乳の谷間で躍ってしまっているのはいったい全体どういうわけだ!?

(ああ、雛子先生、ごめんなさい……ごめんなさい！ でも俺……ああッ!?)

びゅびゅつと飛びだしてしまふ濃密なカウパー。ルリエの鎖骨近くまで飛び散ったそれは、激しい乳肉の動きに合わせて周囲に四散する。

「はああ……はああ……ああ……ああ、可愛い、慎吾クン、チンチンの先っぽが、こんなに膨らんだり縮んだりしてる。イキたいんでしょ？ ねえ、射精したいんでしょ!？」

「ううっ、ルリエさん!？」

麻薬でも打たれてしまったかのように脳裏が白濁し、手足の力が萎えていく。泣きたいほどの気持ちよさ。射精衝動が一気に膨れあがり、快感の津波が少しずつ大きくなる。

(……ああ、気持ちいい！ 気持ちいい、気持ちいい!!)

快楽神経を直接しごき抜かれるような強烈な電撃。

張り出したカリ首が滅茶苦茶に揉みこねられ、黒い衝撃が背筋に繰り返し突き上がる。

「ああ、ダメ！ 出ちゃう！ もう精子出ちゃう！ 射精しちゃううっ!!」

「いいのよ！ いっぱい出して！ 我慢しないでいいのっ！ 精液たくさん出して！！ ああ、私もイッチャウ！ おおおっ！！」

グチュグチュと二つの巨乳で揉みくちやにされ、視界にピンク色の薄膜がかかる。

気がつくとは彼はルリエの乳房の上下動に動きを合わせるように腰を振り立て、さらなる恍惚の淫呪に身も心も浸そうとしてしまっていた。見ればエロ水着姿の妖艶美女も、たわわな乳房に搾乳じみた手つきでグニグニと快感のさざ波を送りこんでいる。

「イ、イク！ ああ、射精する！ ルリエさん、あつ、あつ、あああつ！」

「出そう！ 慎吾クン、いっぱい出そう！ 男の子なんだもん！ 元気に出して！！」

色っぽい声をあげながら、さらにむぎゅううつと左右の乳房を陰茎に擦りつけ、激しく上下に動かすルリエ。陰囊が加熱し、肉茎がビクビクと震える。ルリエ自身もアクメが近づいてきたのだろう、小鼻がせわしなく開閉し、搾乳する手つきがさらに速まる。えぐれるようにくびれた細腰が盛んにくねり、たっぷりの豊臀が派手にグラインドした。

「もうダメ！ もうダメ！ —— いっ、ご、ごめんさい！ あああああつ！！」

「ああ、出して！ 私に精子いっぱいかけて！ ああ、気持ちいい！ ひいいっ！！」

ぶぢゅっ！ ぶぢゅるっ！ ぶぢゅっ、ぶぢゅっ！ どびゅびゅっ！！

「きゃあああああつ！！」と艶めかしい嬌声を張りあげ、二つの勃起乳首からびゅるびゅるびゅるうっ！！ と勢いよく母乳をしぶかせながら、完熟未亡人が肉感的な肢体をダ



「ごめんね、慎ちゃん。先生、何も知らなくて。一人でつらい思いさせて」

「先生!？」

「大きくなったね、慎ちゃん。いつの間にかすぐ大きく……遅しく。ごめんね、自分の旦那さんになる人なのに、先生、いつまでも子供みたいな気がして……」

もう一度鼻を吸り上げると、雛子先生は大きな瞳を涙で潤ませたまま、とびっきりの笑顔を見せた。

「しよっ、慎ちゃん! もう我慢する必要なんかないのよ。エッチしよっ! 先生と、いっぱいいっぱいエッチしよっ!」

女教師はほんのりと顔を赤らめてそう言うともう一度慎吾に熱烈に口づけ、片手で彼の股間をまさぐった。モゾモゾとズボンの上から自分の陰茎を愛撫する先生の手の動きに、彼の性感はたちまち敏感に反応し、微弱な電気の火花を散らせる。

「せ、先生……あのっ!？」

「何も心配しなくていいの。全部聞いたわ。今度は先生が慎ちゃんを守ってあげる!!」

そう叫ぶと雛子先生はベンチの上に少年の身体を押し倒し、勢いよく覆い被さってきた。大気はひんやりとしているのに、いつの間にかその身体は驚くほどの熱を帯びている。

「雛子先生、それじゃ!？」

少年は自分の身体に見る見る新たな勇気が湧き出すのが分かった。この人を失わずにす

んだことが、こんなにも自分を幸福な気持ちにさせるなんてとあらためて雛子先生の存在の大きさを思う。「ああ、先生ッ……先生!!」と慎吾は年上のフィアンセの身体を両手に掻き抱いた。嬉しさのあまり、鼻の奥がツーンと痺れた。

「ああ、慎ちゃん……ちゅぱ……可愛い子……むんっ、私の……慎ちゃん……ちゅう」

「ちゅる、ぢゅう……はあはあ……先生……むはあっ、雛子……先生……」

雛子先生と手を繋いで公園の森の奥まで分け入った慎吾は、灌木の茂みの中に立つ樹齡ウン百年といった感じのどでかい巨木にコートを脱いだフィアンセの背中を押しつけると、激しく先生の口を吸いながら震える手で彼女の白いブラウスのボタンを外していく。

ハラリとブラウスの合わせ目がはだけた。甘ったるい女性の芳香とともに、白いブラジャーに包まれた豊熟の巨乳のくつきりした谷間が露わになる。

慎吾は自分の呼吸がどうしようもなく乱れていくのを感じながら、ブラウスの合わせ目をさらに左右に開くと、剥き出しになった純白のブラカップの縁に鉤のように二本の指を引っかけ、クイッとずり上げた。

ぷるるんっ——。ブラカップと一緒に一旦上に上がった乳塊が、自分自身の重みでたぶたぶと弾みながら元の位置に戻ってくる。その動きは、プラスチックの容器から飛び出て皿の上で揺れるおいしそうなプリンを思わせた。先端の乳輪の肉までこんもりと隆起させた練り絹のような乳房。搾りたてのミルクに桜のエキスを注入したような、何ともあでや

かな色をしているのが悩ましい。つんと勃起した乳首も彼の劣情を煽った。

「ああ、先生、ちゅば……ちゅうちゅう……んああ、せ、先生の……乳首……ちゅう」
「おおっ……慎ちゃん……ううっ……!?」

熱風のように熱い息を吐きながら自分の乳房の先端にむしゃぶりつく慎吾の頭を、雛子先生は愛おしそうに搔き抱き、「いっぱい吸って！ 舐めて！」とねだるように彼の髪をくしゃくしゃに撫でた。少年はそんな先生の行為に煽られるように、完全に勃起したピンク色の乳首をザラザラと舌で擦り上げる。硬くて柔らかな、グミのような舌触りが心地よい。何度舌先で弾き倒しても、乳肉の頂にめりこんで倒れた乳芽は、しなやかな弾力とともに乳頭部にびよこりと屹立し直す。

「ああ、おっぱい。先生の……雛子先生のおっぱい……ちゅうちゅう……むはあっ……ちゅうちゅう、ちゅばちゅば、ちゅうちゅう……」

何度夢に見たことだろう。こうして雛子先生に抱きしめられながら、赤ちゃんみたいに先生の乳首にむしゃぶりつく日を。先生に「いい子いい子」されながら、コロコロと先生の乳首を夢中になつて舐め転がせる日を。

「んああ、慎ちゃん。んふっ♪ そんなにいっぱい吸っても……おチチ出ないわよ？」
冗談めいた甘い声音で、先生は慎吾にそう囁いた。

「吸いたい、慎ちゃん？ 先生に、おチチ出るようになってほしい？ あふうう……」

少年は先生の勃起乳首を上下の歯でカジカジと甘噛みしながら、何度もうんうんとうなずいた。吸いたい！ 先生のおっぱいから出る母乳……ああ、飲みたい！ 飲みたい！！

「だったら……こども作ろう、慎ちゃん。先生と慎ちゃんの、こども……」

「ああ、先生……！」

乳首から唇を離そうとすると、先生の灰白い乳房が付きたての餅のように柔らかく伸び、ばふんつと卑猥な音を立てて剥がれた。たぶたと揺れる先生の乳頭部は、慎吾に吸われたために赤く変色している。慎吾は先生の細く白い首筋に息を吹きかけながら今度はちゅうちゅうとそこを吸った。

「ひん、し、慎ちゃん……!? か、感じるうっ……！」

「ああ、先生……先生……」

ズボンの中の一物は、もうどうにもならないほどギンギンに張りつめている。

慎吾は先生のミニスカートをずり上げ、剥き出しになった先生の太ももや恥丘に、硬くなったそれを擦りつけた。先生の柔らかな肉が、亀頭冠の形に盛りあがった慎吾の股間の膨らみを押しつけられて弾力的にへこむ。張り出した亀頭のエラにビリビリと感じる、快美な電流の拷問。ショーツのクロッチに覆われた部分にパンスト越しにさらに亀頭を押しつけると、先生の唇から「あはううっ」という色っぽい嘆声 leaked。

「先生、ぼ、僕もう……はあはあ……我慢できないよ……はあはあ……先生……」

グリグリと先生の股間の柔肉に勃起を、先生の首筋に唇を押しつけながら甘えるように言う。少年の身体を、じわじわと耽美な欲望が蝕んでいた。お返しのように、先生も腰をくねらせて慎吾の勃起に股間を擦りつける。感じる。ショーツの前布の向こうで、先生の淫肉がとろけてヌチャヌチャしているのを。慎吾は亀頭冠を、そして全身を疼かせながら甘ったるい幸福感にどっぷりと浸った。

「いいのよ、もう我慢しなくて。たくさん我慢したでしょ？　もういいの、先生を好きにしているのよ」

先生の目は闇の中でもはつきり分かるほど潤んでいた。

感激のあまりなのか、興奮のせいなのか、慎吾には分からない。

「で、でも……はあはあ……こんなところで……？」

「だって……先生も……もう我慢できないんだもん……」

何て可愛いんだろうと慎吾は脳髓が沸騰するような興奮を覚えた。男という生き物は好きな女性を愛しいと思えば思うほど、どうしてその人に対して獐猛な気持ちになってしまうのだろう。慎吾は雛子先生の身体を巨木に押しつけると彼女の股間に屈みこみ、そのむつちりした下半身を包装するパンストをビリビリと破いた。

「ああっ！　し、慎ちゃん!!」

それから、股間を覆っていたショーツの縁に鉤のように曲げた両手の指を引っかける。

そして桃の皮でも剥くように勢いよくそれを下ろすとスルスルと太ももを滑らせ、ふくらはぎを下降させて右足から完全に脱がし、もう片方の膝のあたりにまとわりつかせた。

夜目にも白い雛子先生の恥丘が露わになり、下着に圧迫されてこもっていた馥郁たる牝の芳香がほわあつと虚空に拡散する。甘くて、どこか微妙に乳臭く、鼻腔粘膜を、そして脳髓をじわじわと浸蝕するむせ返るような匂い。そこにほのかに、汗やアンモニアの匂いも混じっているのが慎吾の劣情を煽った。それ自体が別の命を持つ生物であるかのように、ぬめぬめ肉ラビアが左右に羽を震わせている。とろみを帯びた熱い汁が膣穴の奥からとろとろと噴きこぼれているのが分かった。

「先生……ああ、僕、も、もう……」

慎吾は自分もトランクスごとズボンを脱ぐと、亀頭冠を薄桃色の包皮が半分ほど覆う半包莖の勃起男根を露わにし、ショーツをまとわりつかせているほうの膝の裏に手を潜り入れると、彼女の片足をグイッと抱えあげた。

にちゃっ——蝶の羽にも似た雛子先生の股間の肉ラビアが左右に開く、下品な粘着音が響く。すでに蜂蜜のようなドロドロの粘り汁をこんこんと湧き立たせた先生の秘肉は、小陰唇の肉ビラが開くやいなや、サーモンピンクの媚粘膜からさらに大量の愛液をどろりと溢れさせた。少年は半分ほど皮を被った陰莖の先端を愛する女教師のぬめる秘割れに押しつけると、求め合う心と心を戯れあわせるかのように、亀頭と牝粘膜を擦り立てる。

ぐぢゅぐぢゅ、ぬぢゅぬぢゅ、びちやびちや、ぬぢゅ。

「おはあつ！ し、慎ちゃん、おつ、ほおおつ!!」

ピンク色のラビアが肉穴のとは口で甘えるペニスを愛おしむように亀頭を艶めかしく包みこむ。火照った身体を絶え間なく駆け抜ける快感電流。肉竿に添えた手を動かしてペニスをわずかに上下させると、移動する亀頭に合わせてラビアが形を変え、快感の露が飛ぶ。

「ああ、先生……気持ちいい……僕、もうこれだけでイッちやいそうだよ……」

過敏な亀頭の肉肌に感じる強烈な激感に、慎吾は歓喜の声を漏らした。

「はあはあ……ああ、慎ちゃん、ダメよ、男の子でしょ……」

彼の首に両腕を回した雛子先生に、少年はなおも頭を優しく撫でられながら囁かれる。

「……入れて。思いつきり、慎ちゃんのオチンチン、先生のそこに入れて。先生を、慎ちゃんのものにして……」

そう言うと、雛子先生は慎吾のペニスをねだるように自らも腰をくねらせ、膣穴の入口へと亀頭をいざなう。にゅぷうっ……繊細な快楽神経の集中した亀頭冠が粘膜の窪みと擦れ合う感触。亀頭から麻薬入りの熱湯がしぶくような肉悦を覚えながら、慎吾は自分の身体に強烈な支配本能が漲るのを感じた。

「せ、先生！ ああ、先生！」

「入れて！ 早く……一つになろう！ 先生と……身も心も、ひ、一つにいつ!!」

慎吾はもう一度「先生！」と叫びながら、腰を前に突き出した。狭い膣穴の入口に亀頭冠の先端が潜りこみ、包皮がズルズルと剥けて後退する。完全に剥き出しになった赤銅色の肉鈴が、にゆるんつと凸凹した窮屈な肉の重なりの中に飛びこんだ。

「ああ、い、痛ッ！」

その瞬間、雛子先生の身体が強烈な電流を浴びたようにヒクンッと震える。

先生の悲痛な声を聞き、慎吾はようやくやく彼女が処女であることを思い出した。

「あつ、ご、ごめんっ！ 痛い、先生!？」

反射的に腰を引き、亀頭を抜き出そうとする慎吾。

だがそんな少年の動きを、彼の首や背中に回った女教師の腕が押しとどめた。

「いいのっ！ そのまま入れて!!」

「で、でもっ!？」と戸惑う慎吾に、さらに強い調子で雛子先生の言葉が飛ぶ。

「痛くして！ 先生に痛い思いさせて！ 一生忘れられない素敵な痛み、ちようだい!!」

「ああ、先生!？」

可愛すぎて、嬉しすぎて、もう何が何だか分からない。慎吾は脳味噌が沸点を超えて爆発しそうななるのを感じながら、もう一度腰に力を入れ、グイッと前に突き出した。

にゅぷるうううっ！ 狭い肉道を掻き分け、亀頭冠の形にえぐりながらぬぷぬぷと膣穴を浸蝕する慎吾の男根。だぶついた包皮の先端がぬめる肉襞の凹凸と擦れ合い、亀頭と包

皮の間に白濁した愛蜜と破瓜の鮮血が飛びこんで泡立つ。目も眩むような甘酸っぱい快感がペニスから全身に広がった。気を抜けばすぐにも射精してしまいそうな、強烈な恍惚。

「ああ、い、痛いっ！ あああっ!!」

雛子先生は両手に力を入れ、ギュッと少年の身体を抱きすくめた。慎吾は罪悪感を感じつつもそれをはるかに上回る興奮に支配されながらずぶずぶとペニスを挿入し、ついに根元まで愛する女教師の産道の中に丸ごと埋めこむ。少年が抱えあげた片方の足の股の付け根でしなやかな臍がグボツと盛りあがり、鼠径部に深い窪みを作った。慎吾のペニスを啜えこんだ先生の肉穴からたらりと深紅の鮮血が溢れ、もう片方の足の太ももを伝う。

「はあはあ……ああ、慎ちゃん。やつと……やつと一つになれたね」

「先生……ううっ、も、もう僕……気持ちよすぎちゃって……しや、射精しちゃう」

嘘ではなかった。剥き出しになった亀頭冠をもてなすように、ヌルヌルした腔粘膜のヒダヒダが盛んにペニスを搾り立てている。強烈な激感が股間から脳髓に、そして四肢の隅々にまで瞬時に伝わり、染み渡り、目の前で音もなく白い光が閃く。

「だめよ、慎ちゃん。動かして。オチンチン、いっぱい動かして。先生も、気持ちよくさせて……がんばるのっ!」

「むはあっ、せ、先生いっ!」

必死に肛門括約筋を窄めながら、慎吾は腰を前後にくねらせ始めた。窮屈で温かな肉の

重なりの中で、肉棒が前へ後ろへと動く。ペニスを疼かせる熱い衝撃。入れても出してもぬめる肉膜が亀頭冠を甘酸っぱく揉み潰し、熱湯がしぶくような快美感を注ぎこむ。

「ああ、し、慎ちゃん……痛ッ！ あンッ！」

「先生い!？」

「いいの、先生はいいの！ 気持ちいいでしょ、慎ちゃん？ 先生の中、気持ちいい!？」

雛子先生は慎吾にしがみつき、耳元に熱く甘い息を吹きかける。

「う、うん、気持ちいい。気持ちよすぎる、最高だよ、雛子先生」

少年は少しずつ腰の動きが加速し始めるのを感じながら、女教師に甘えた声を返した。メガネのレンズが、少年の吐息でほわあっと白く曇る。雛子先生は痛みに顔をしかめつつ、「もっとよ、慎ちゃん、もっといっぱい動いて」と慎吾を煽った。少しでも少年に気持ちよくなってほしいという献身的な思いからだった。

「ああ、せ、先生……たままない……先生の中……ヌルヌルして、温かくて窮屈で……」
りの肉壺も気持ちよかったが、雛子先生の蜜穴のほうが年齢相応に硬さがほぐれ、自分のピストンに合わせて急速にふやけていくような感覚があった。

それは決して慎吾の気のせいではない。少年の初々しいペニスに擦られるたび、雛子先生の淫肉には痛みとは別に酸味の混じった快美感が閃きだし、肉褻の奥から熱い淫悦の汁がトロトロと湧き出してくる。

「慎ちゃん……ああ、せ、先生……先生も……き、き、気持ちいい……気持ちいいわ」
「ほ、ほんと、先生!？」

雛子先生はその言葉を聞いたとたん、慎吾の中に痺れるような幸福感が湧き上がる。自分一人で恍惚を享受するのは気が引けた。先生も自分と同じような快楽を味わっててくれると思うと天にも昇らん気持ちが高まる。

「先生、僕幸せだよ。こうしかなかった。大好きな先生と一つになって、こうやって……」
ぬちゃぬちゃぬちよん……ぐちゃぬちゃ……ぬちゃぬちゃぬちゃ。二人の心が一つにとろけあっていることを伝えるかのように、膣肉の淫らな掘削音が秘めやかに響く。

「ひい、慎ちゃん。あぁっ……！」

「先生の温かなオマ○コの中で、オチンチンを入れたり出したりしたかったんだ。こうやって先生に抱きしめられて……いい子いい子されながら……」

「ソフッ、甘えっ子。慎ちゃんの……甘えっ子さん……♪」

自分の身体が徐々に経験したこともないような甘い痺れに浸蝕され始めてきたのを感じたのか、雛子先生は少年の髪を何度も撫でた。愛おしくてたまらない、というように。

「ああ、慎ちゃん、もつと擦って……先生のオマ○コ……慎ちゃんのオチンチンで」

少年に片足を抱えあげられた不安定な格好のまま、メガネの女教師は彼の動きに合わせて自分からも腰を前後にくねらせだした。破瓜の痛みは完全に消えたわけではないのだろ

うが、その痛みさえもが、彼女をたまらなく幸せな心地にさせる。

「ううっ、先生。気持ちいいよお……ああ、オチンチン、最高に気持ちいい……」

慎吾は夢中になって腰をくねらせ、さらに熱い潤みを湧き立たせだした先生の花肉の中でぬちゃぬちゃ、ぴちゃぴちゃと秘めやかな粘着音を立てて桃色ペニス抜き差しする。

いまだ成長途上の、少年の華奢な身体を快感の荒波が翻弄した。

くぢゆくぢゆ、ぬぢゆぬぢゆ。ねちやぴちや、にちやにちや。

「んああ、慎ちゃん……ふひい……!!」

互いの性器を夢中になって擦りあわせる行為が、人をこんなにも幸福な気分させるものだとは、想像以上だった。ピストンを繰り返すごとにとろみを増す膣肉にペニスの滑りはさらによくなり、少年はいつの間にかものすごい早さで先生の膣壁に己の亀頭冠の出っ張りを擦りつけ始める。

「ああ、慎ちゃん、チュウして。先生にチュウ……チュウしながら、チンチン入れたり出したりして……むうっ、ちゅぱ、ぢゆる、ちゅうちゅう、ちゅぱ……おおっ……」

「先生……雛子先生……ちゅっ、ちゅぱ、ぢゆる、ちゅうちゅう……ちゅぱ……」

貪りあうように相手の唇を吸い、下品な唾液音を立てて舌を絡ませながら、二人の腰の動きはさらに激しくなっていく。剥き出しになった小玉スイカのような先生の乳塊が、カクカクと腰をくねらせる動きに合わせてたぶたと揺れ弾み、狂おしいほど勃起した桜色

の乳首が虚空にジグザグの線を描く。擦れ合い、絡みあう、先生と少年の股間の縮れ毛。女教師の淡い秘毛は、徐々に下敷きに擦られでもしたように慎吾に向かってそそけ立つ。「先生……み、見える、見えるよ……僕のチンチンが、先生のオマ○コの中、出たり入ったりしてるとこ……」

雛子先生から唇を剥がした慎吾は、潤んでぎらつく瞳で自分たちの肉体の接合部分を見下ろし、さらに淫悦を募らせた。

「や、やだ、慎ちゃんったら……!! そんなとこ見ないで……せ、先生、恥ずかしい!」
「はあはあ、せ、先生のオマ○コから白い汁が出てきてる……白い汁が僕のチンチンをヌルヌルさせて……ああ、糸引いてる……先生のオマ○コとチンチンの間で糸引いてる」

「し、慎ちゃん、い、いやン、そんなこと言われたら……先生、興奮しちゃう……」
二人は互いの身体を密着させながら、ひたすらヌチャヌチャと腰と腰を擦りあわせた。完璧に、二人だけの世界。夜の公園の森の中とはいえ、完全な密室ではないことなど、興奮で麻痺した二人にはどうでもよくなっていた。

「……ああ、すごい。こ、こんないやらしいセックス、見せられたら……はふうっ」
そんな切ない独り言を漏らしながら、木陰からこっそりと二人の睦み合いを出菌亀している一人の女がいた——ルリエである。

彼女の片手は自分の股間に伸び、下着の前布を脇に押しやって隆々と勃起した陰核を円を描くように愛撫している。もう一方の手は、ボディコンスーツの上から爆乳を鷲掴みにして、もの狂おしい手つきでグニグニと揉みこねていた。

「はあはあ……ああ、興奮しちゃう……すごいセックス……す、すごい……」

雛子先生を心配して後を追ってきたルリエは、あれよあれよという間に、二人の激しい絡みあいの傍観者に仕立て上げられてしまっていた。盗み見るつもりはなかったが、もうこうなると目を離したくても離せない。愛する二人のまぐわいは技巧などとは無縁の拙い交接だったが、「見ているほうが恥ずかしくなるほど」とはこういうことを言うのだろうと言うほど、女教師も少年もどっぷりと二人だけの世界に耽溺している。

性器と性器を擦りあわせながら、互いの魂に触れあおうと二人がもがいていることがよく分かり、ルリエは熟れた肉体にどうにもならないほどの肉悦を覚えた。

「すごい……すごい……あんなに激しく腰を振りあつて……ああ、燃えちゃう……！」

ぐちゅぐちゅ、ぐちゅぐちゅ、ぬちゅぬちゅつ。彼女が夢中になって揉みこねる勃起秘核の下では、ふやけきった肉ラビアが開花し、中から熱いよがり蜜が溢れ始めていた。

ルリエはあはあと息を荒げ、あまりの熱さにコートを脱ぎ、自分の手を陰核から秘肉のワレメへと移した……。

「はあはあ……ああ、せ、先生……もうダメ……僕もう、しゃ、射精しちゃう！」

カクカクと猛烈な速度で腰を振りながら、慎吾は今度こそどうにもならない臨界点が迫ってきたことを雛子先生に告げた。

「慎ちゃん、がんばったね……いっぱいいっぱい、先生をオチンチンで、よ、悦ばせてくれたね……はふうっ、いいのよ、いっぱい出しちゃおっ……先生の中に……はふうっ」

「ああ、せ、先生！」

もう一度先生の片足を抱えあげ直して、ラストスパート。下から女教師の身体を突き上げるようにして彼女の肉割れに勃起男根を叩きこむ。

ぐちゃぬぷっ、ぐちゃぬぷっ。雛子先生の破瓜の鮮血と白濁し始めたよがり汁が混じりあつて垂れ流れ、少年の陰囊までを紅白のまだら模様にした。慎吾に突き上げられて徐々に上へ上へと上がっていく女教師の身体。爪先立ちになった足がフルフルと小刻みに震え、魚の腹のような健康的なふくらはぎにしなやかな筋肉がグボツと盛りあがる。

「イッチャうよ、先生。イッチャうよっ!!」

自分自身も爪先立ちになり、巨木の木肌と自分の重みで雛子先生をサンドイッチにする形になりながら、少年は猛然と腰を前後にくねらせる。力いっぱい抱きしめ返す先生の切ない力。自分の首筋に顔を埋めた先生のメガネがカチャカチャと音を立て、熱く湿った吐息がほわあつと吐き出される。一気に募る射精衝動――。



「来て、慎ちゃん。精液、ちょうだい！ 先生の中に……中にいいいっ!!」

「ああ、も、もうダメだっ！ 出ちゃう！ 精子出る、出るっ！ あああああっ!!」

「おはああああっ！ ああ、慎ちゃん！ あああああああっ!!」

ぬちゃあっ!! 少年は自分の股ぐらを思いきり離子先生の股間に押しつけ、押しあげる。先生の爪先が地面を離れた。

びぢゆるっ！ びぢゆるびぢゆるっ！ びぢゆるびぢゆるっ！ びぢゆるびぢゆるっ!!

陰茎の肉ポンプが何度も膨張と収縮を繰り返して、濃密な白濁粘液を勢いよく女教師の膣道の奥深くに向かって射精する。言葉ではなく肉体で応えようとしたかのように、先生の膣肉が蠕動し、射精して過敏になった少年のペニスを波打つように揉みこんだ。

「うっ、あっ、ああっ……」とあまりの気持ちよさに、慎吾は思わず甘えた呻き声を立てる。そんな彼の身体を、もう一度離子先生がギュッと抱きしめた。

「ハフン……いっばい来てる。いっばい来てるよ、慎ちゃん。はあはあ……温かでヌルヌルした精液が、先生のオマ○コの中に……いっばい……はあはあ……気持ちよかった？」

うんうん、と慎吾は何度もうなずいた。そんな彼の頭をまたも先生が「いい子いい子」と撫でさすり、背中に回したもう片方の手で彼の背中をゆっくりと叩く。まるで子守歌を歌う母親みたいなリズムで。そんな先生の反応に癒やされるように、ようやく肉ポンプが動きを弱め、やがて彼は先生のぬめる肉穴の中に精液を吐き出し尽くした。

こんな幸福で満ち足りた気持ちになったのは、いったいいつ以来のことだろう。

少年は先生の身体に体重を預け、愛しいフィアンセの汗ばんだ体臭と体温を感じながら、そっと目を閉じた。幼かったあの日——とてつもなく綺麗な家庭教師の先生を見上げて呆然と立ちすくむ自分に、膝に両手を当てる屈みこみ、「初めまして。よろしくね、慎ちゃん」と微笑みかけてきた雛子先生のとえようもなく美しい笑顔を久しぶりに思い出す。

ガサリッ！ その時、思いのほか近くで下生えの灌木が耳障りな音を立てた。

「——えっ!？」

あわててそちらに目をやった慎吾は、木の陰からよろよろと両足をもつれさせて出てきたルリエの姿を認め、驚きの声をあげた。

先生もあわてて両足を地面に下ろし、慎吾の身体に「ひっ!」としがみつく。

ちゅぽんっ！ 先生の媚肉からペニスが抜け、ひんやりとした夜更けの空気に包まれた。

「ル、ルリエさんっ!？ あっ!」

慎吾は剥き出しの股間をあわてて押さえながらそう叫ぶ。

「ご、ごめんなさい！ はあはあ……盗み見るつもりはなかったの。雛子先生と慎吾クンのことが心配で、心配で……後を尾けてきたら、こ、こんなことに……ああっ……」

慎吾と雛子先生は目を剥いてルリエを見た。完熟の美人未亡人は切なそうに両目を潤ませ、ぼつてりした唇を半開きにしたままはあはあと熱い吐息を虚空に漏らしている。

少年は、キッチンのテーブルに座ってニコニコと意味ありげに自分のほうを見ている四人の美女の視線にたじろいだ。

「ど、どうしたの、みんな」と薄気味悪くなりながら、彼は全員に問いかける。

「うふふ。何の話をしていたと思う、慎ちゃん？」

悪戯っぽい微笑を清純そうな顔に浮かべながら、メガネの女教師が小首をかしげた。

「私たち、慎吾クンとエッチした時のことを、雛子先生にお話してたのよ〜♪」

ボディコンルックの妖艶な未亡人に色っぽい声でそう言われ、慎吾は思わず「ええっ!!」

とすつとんきような声をあげた。

「ど、どうしてそんなこと?!」

あわてて雛子先生の顔を見つめ直す。

それは、彼にとっては絶対に聞かれたくないことだらけの話題。ということとはつまり、

先生にとっては絶対に絶対に聞きたくないことなのではないか!?

だが栗色の髪の女教師は、胸元を彩る深紅のリボンを揺らしながら、嬉しそうに笑う。

「私がお願ひしたの、みんなに」

「ひっ! 雛子先生、どうしてそんなこと?!」

あまりに意外すぎるフィアンセの答えに、少年は頭の上に「?!」を多発させた。

「だって……知りたいじゃない」

濃紺のスーツの清楚な女教師は、慈愛に満ちた眼差しで風呂上がりの少年を見つめる。「私の王子さまがどれだけ一生懸命我慢して、お祖父様との約束を果たそうとがんばったのか。そして……」

ガタリ、と椅子を後ろにずらすと、雛子先生はおもむろに立ち上がった。

「……どんなエッチなことを、こんな可愛い人たちとしちゃったのか。だって、私だって女だから、やっぱりちよつと悔しいでしょ♪」

「先生!？」

慎吾には分かった。それが雛子先生一流の、みんなへの思いやりであることが。気まずい雰囲気を一掃して互いにもっと素直に、そして親密になるために、もっとも触れたくない部分をタブー視せず、あえて面と向かって乗り越えてしまおうとしていることが。

「平クン、立派でしたわ。いえ、変な意味じゃなく……男として、すごく立派でした」
麗美奈がそう言って、椅子から立ち上がる。

続いてメイド少女のりのが椅子からぴょんと跳び上がり、「えへへ。『変な意味』でも、おにいちやま、男としてすごく立派だったのお!」とお茶目な笑顔を見せた。

「麗美奈ちゃん……りのの……!？」

「雛子先生が本気で羨ましくなっちゃった。こんな素敵王子さまと結婚できるなんて。私も……ううん、私たちも、せめてもう一度だけでも、こんな可愛い王子さまとラブラブ

「イチャイチャできたらな〜って♪」

ゾクゾクくるような色っぽい声でそう囁き、最後に椅子から立ち上がったのは、ルリエ。四人の女は互いに顔を見あわせると意味深に微笑みあった。

「ということでは……ねっ!」

「えっ、なに……? あっ、なに、なに!? わああっ!!」

雛子先生の言葉が合図でもあったかのように、「きゃあっ!」と黄色い嬌声をあげながら慎吾に飛びついていく四人の美女。予想もしなかった突然の事態に、トレーナー姿の少年はわけも分からず情けない声をあげ、あっけなくキツチンの床に押し倒される。

「どうしたの、みんな!? 雛子先生ッ!? あっ、なんなの! ああっ!」

仰向けに寝転がされた慎吾はトランクスごと、ジャージを膝の下まで勢いよくずり下げられてしまう。湯上がりで気持ちよさそうに萎びた桃色ペニスが情けない姿で、ふにゃつと美女たちの眼前に晒された。

「うわあ、可愛い♪ オチンチン、フニャフニャなのおっ!」

「ああ、平クン、可愛いですわ。こんな可愛いチンチンがあんなに大きくなるのですわね」
「お風呂上がりのフニャチン、みんなでたっぷり味わいましょ。ねえ、先生?」

「そうそうっ! さあ、みんな、いこっ♪」

四人の美女は黄色い歓声をあげながら競い合うように慎吾の股間に首を伸ばし、湯上が

りでほかほかした清潔な陰茎をレロレロと舌で舐め始めた。

「うっ……うああっ!? みんな、何を……ううっ!?」

快楽神経を針でツンツンと突かれるような鋭い快感が萎え茎から火花みたいに閃く。慎吾から見て、右からスーツの雛子先生、学園の制服姿の麗美奈、露出度満点のボディコン姿のルリエ、そして左端にメイド少女のりという並び。みながみなローズピンクの舌を思いきり突き出し、タイプの異なる美貌を淫らに歪めて慎吾の陰茎を舐め転がしている。

「ぴちゃぴちゃ、れるれる……オチンチン、可愛いのおっ……ぴちゃぴちゃ」

「ああ、興奮してしまいますわ……れるれる、れるん……平クン……ちゅう……」

「う、うそお……!? ど、どういうこと……雛子先生!?」

助けを求めるように、少年は右端の雛子先生を見た。

「れるれる、ぴちゃぴちゃ……あら、慎ちゃん、どうしたの。気持ちよくない? 美人揃いの女性軍団がみんなでおチンチンを舐めてあげてるのよ。ぴちゃぴちゃ……」

餅肌の美貌を紅潮させ、こともなげにそう言う雛子先生。ナメクジみたいな先生の舌先がゾッとカリ首のくびれの部分を舐め上げる。ツーンと甘酸っぱく股間が疼いた。

「い、いやっ……気持ちいい……気持ちいい……けどっ……!?」

「ちゅぱ、れるれる……むはあ、ああ、慎ちゃん……これは……私の気持ち♪」
盛んに少年の陰茎を舐め転がしながら、メガネの女教師は言う。

「そして、私たちみんなの気持ち……ちゅぱ、ぢゆる、れろん……慎ちゃん、すぐがんばったんだもん。今日だけはみんなの……みんなの王子さまよ！」

「せ、先生!? うわあっ!」

陰茎から湧き上がる耽美な恍惚感が小刻みに高まっていく。

四つの舌で繰り返し擦り上げられ、甘い衝撃がビリビリッと股間を痺れさせた。

「ぢゆるぢゆる……ンフフッ、だんだんおつきくなってきたわよ、慎吾くん……ぴちゃぴちゃ、ぢゆるぢゆる……ほら、みんな、見てみて……チンポが膨らんできた……」

妖艶な未亡人が興奮して潤んだ瞳を細め、幸せそうに呻く。

彼女の言葉通り、少年の陰茎は次第に力を漲らせ、空気を注入される蛇のオモチャみたいにムクムクと股間に硬く、大きくなっていく。

「きやあつ、きやあつ! 勃起してきたのお! すごおいつ!」

「ああ、慎ちゃん……オチンチン、反り返った……すごい嬉しい……はああ……」

「ひい!? 亀頭がこんなにも膨らんで……平クン、い、痛くありませんの?」

充血して赤銅色に膨らみきった亀頭冠を至近距離で見つめ、学園のアイドル少女が目を剥きながらも心配そうに呟いた。

「痛くなんかないのよ、麗美奈ちゃん。男の子はね、こうやって亀頭が膨らみきった状態が一番気持ちいいの。そうでしょ、慎吾くん……ぴちゃぴちゃ、れろれる、ぢゆる……」

「ああっ、ルリエさん……み、みんなあ……うわっ……あっ、あっ、あっ……」

「おにいちゃまあ……ああ、ビクビクいつてる……ちゅばぴちゃ、ぢゆる……」

「れぢゅれぢゅ……ぢゆる……ああ、平クン……すごい。オチンチンって、こうやって大きくなるんですね……ううっ、いやらしい……ぴちゃぴちゃ……」

「慎ちゃん……可愛い王子さま♪ ぴちゃぢゆる……れるろ……ちゅうちゅう……」

信じられないような恍惚感が股間から全身に広がる。一人に舐められるだけでも気持ちいいのに、四人もの美女が競り合うように男根に舌を絡みつかせてくるのである。

少年の陰茎は嬉しさに悲鳴をあげるかのように膨張と収縮を繰り返し、あっという間に力強く反り返ってビタンッと自身の腹に龟头天部を叩きつけた。

「うふふっ、慎ちゃん、勃起しちゃったわよ♪」

「きゃー、タマタマ可愛いのおっ！ ナメナメしちゃうのおっ！」

勃起した陰茎をそっと掴み、雛子先生がしこしここと上下にしごきます。ペニスが反り返ったために剥き出しになった陰囊に群がる、りの、麗美奈、そしてルリエの唇。三人がってきた餅にでもむしゃぶりつくように、放射線状に縮れ毛を生やした肉袋に吸いつき、中の睾丸を転がしながら、皺々のどす黒い肉を舐めたり吸ったり伸ばしたりする。

それはまさに、この世の至福。三人の美女に金玉を舐めしゃぶられながら、慎吾はペニスを優しくしごいてくれる雛子先生と目と目を見交わす。

「ひ、雛子先生い……」

「くすっ♪ 気持ちよさそうな顔しちゃって。いいのよ、うんと気持ちよくなつて」

そう言いながら、雛子先生は肉茎をしごく手の力を強め、窄めた唇から粘つく唾液をダラダラと陰茎に垂らした。そしてそれを潤滑油にして、さらにももの狂おしい手つきで少年のペニスをしごき立てる。丸めた親指と人差し指の窮屈な肉環で、肥大した肉傘の出っ張りをスリッスリッ、スリッスリッ……ぬぢゅぬぢゅ、ぬぢゅぬぢゅっ。

「ああ、先生……き、気持ちいい……」

擦り上げられた亀頭から絶え間なく爆発する快美な閃光。泣きたくなるような甘やかな肉悦がじわり、じわりと少年の肉体を浸蝕する。意志とは関係なく、ヒクヒクと絶え間なく開閉してしまふ肛肉。見ると、三人の美女に舐められる陰囊は泡立つ唾液でぬめり、ローションでも塗つたようにいやらしく照り光っている。

麗美奈が一つの睾丸を、そしてりのがもう一つの睾丸を口の中に吸いとり、ビローンと肉袋を伸ばして舌でコロコロと玉転がしをする。真ん中のルリエは伸びた肉袋の筋をさらに伸ばそうとでもするように、れろーん、れろーんと玉袋を丹念に舌で舐め上げた。

陰囊を舐められるのがこんなにも気持ちのよいことなのだという事実を、慎吾は驚愕とともに知り、股間を痺れさせる。二人の美少女の口の中で睾丸が激しく跳ね躍り、言うに言われぬ快感の火柱が脊髄から脳天に勢いよく噴き上がった。



どろっ、どろっ、どろっ、と雛子先生の指にしごかれる鈴口の先から濃密な先走り汁が溢れ出し、亀頭冠を伝って先生の白く細い指をヌルヌルと汚す。

「ああ、ひ、雛子先生！　りの、もうガマンできなくなってきたあ！」

小悪魔めいた美貌のメイド少女が熱い吐息を漏らしながら雛子先生に訴えた。慎吾のフイアンセである女教師への、彼女なりの気づかい。オチンチンほしいよお、とせがむように、先生の手の中の勃起男根に熱い視線を注ぐ。

「私もよ、りのちゃん。こんなに元気に反り返ってるチンチン見たら、誰だってほしくなっちゃうわよね。でも——」

「雛子先生はしこしこと慎吾の怒張をしごいて猛る肉茎に小刻みな快感波を注ぎこみながら、興奮した顔で微笑し、傍らの麗美奈に目をやった。

「一番は、麗美奈ちゃんにしてあげよっ」

「えっ」と驚きの声をあげたお嬢様は、大きく目を見開いて女教師を見つめ返す。

「だって麗美奈ちゃんだけ、まだ慎ちゃんとエッチしてないんでしょ。だから、ねっ？」

「せ、先生……！」

一度は泣きやんでいた麗美奈の勝ち気な瞳に、見る見る涙がこみ上げてきた。

「うえっ、うえっ、うえっ。せ、先生……ごめんなさい……ごめんなさい……」

子供みたいに泣きじゃくりながら、黄色い髪的美少女はメガネの女教師の胸に飛びこん

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>